先進校に学ぶキャリア教育の実践　SPECIAL

福岡・県立 **城南高校**（じょうなんこうこう）

国際化が進む知識基盤社会に対応したドリカム進化型キャリア教育へ

取材・文／藤崎雅子

全国に名が知られる城南高校「ドリカムプラン」。偏差値から学校を選ぶ進学指導が一般的だった時代に生まれ興味・関心から考える進路学習として話題を呼んだ。それから15年。新たな展開を見せる城南高校の今をレポートする。

福岡市中心部にほど近い文教地区にある福岡県立城南高校。理数コースを備えた普通科を設置し、学区内で2番手の進学実績を誇る進学校だ。ある教員は、城南には〝3度の誕生〟がある、という。1度目は1964年度の開校で、1期生から高い大学進学実績をあげるなどの勢いは「城南火山」と称された。2度目は94年度の進路学習ドリカムプランスタートだ。教師主導の進学指導から、生徒主体の進路学習への転換で、学校全体が生まれ変わった。そして3度目となるのが今年度。現代社会をにらんだ新たな人材育成プログラム「C・C・S」を掲げ、すべての教育活動を見直そうと動き出している。

「コミュニケーション」「サイエンス」を強化した「キャリア教育」へ

同校が取り組む人材育成プログラム「C・C・S」とは、キャリア教育・コミュニケーション教育・サイエンス教育の3つのキーワードの頭文字を使ったもので、Career education with Communicative competence and Scientific attitude in global society（国際社会におけるコミュニケーション能力と科学的な態度を育てるキャリア教育）の略である（図1）。

21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」といわれる。将来、生徒たちがこの社会でたくましく生きるために必要な能力、いわゆる「国際標準の学力」とは何か。それを同校は、OECDが定義したキーコンピテンシー（主要能力）、「自律的に行動する能力」「多様な社会グループにおける人間関係形成能力」「社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力」だと考える。その力を備え、高い視座と大きな志をもった人材、つまりビッグ・シンカーの育成を目指すのが「C・C・S」だ。

これは、ドリカムプラン立ち上げから築いてきた城南高校の教育の集大成だという。英語を含めた表現する力と態度の育成を目指す「コミュニケーション教育」。高大連携を進めてきた理数コースのノウハウをもとに、文系にも求められる論理的思考力や科学への関心の拡大・強化を図る「サイエンス教育」。この2つにより生徒の可能性を広げ、これまで行ってきたキャリア教育のさらなる進展を試みている。

近年、周辺で私立高校の新設や男女共学化などが相次ぎ、同校には生徒募集に関して危機感があった。また、おとなしいといわれる同校生徒の将来を考えた時、何らかの対策の必要性を多くの教員が感じていた。しかし「そうした事情がなくてもC・C・Sは必要」と、校長の松木敬明先生は言う。単なる〝城南の生き残り策〟ではなく〝全国の高校に向けた提言〟という認識だ。ドリカムプランがキャリア教育の先駆けとなったように、今も城南は新しい教育の在り方を提案しようとしている。

>>School Data
普通科／1963年創立
生徒数／1190人（男子639人・女子551人）
進路状況（2008年度実績）／大学 71%・
進学準備 29%
福岡市城南区茶山6-21-1
TEL 092-831-0986
URL http://jonan.fku.ed.jp/

Process 立ち上げのプロセス

1994年、興味・関心を大切にする進路学習への転換

「将来に自覚的な生徒を育てようというドリカムプランの理念は、脈々と受け継がれて現在の『C.C.S』につながった」

ドリカムプラン立ち上げの中心人物であり、2008年から教頭として同校に戻ってきた和田美千代先生は、そう話す。現在、同校が新たな「C.C.S」に舵をきって邁進することができるのも、ドリカムプラン開始以来培われてきたノウハウ、教員の高い問題意識と気概、新しいことに挑戦していく校内の土壌があってこそといえる。「C.C.S」のルーツでもあるドリカムプラン。まずはその誕生からふり返っておきたい。

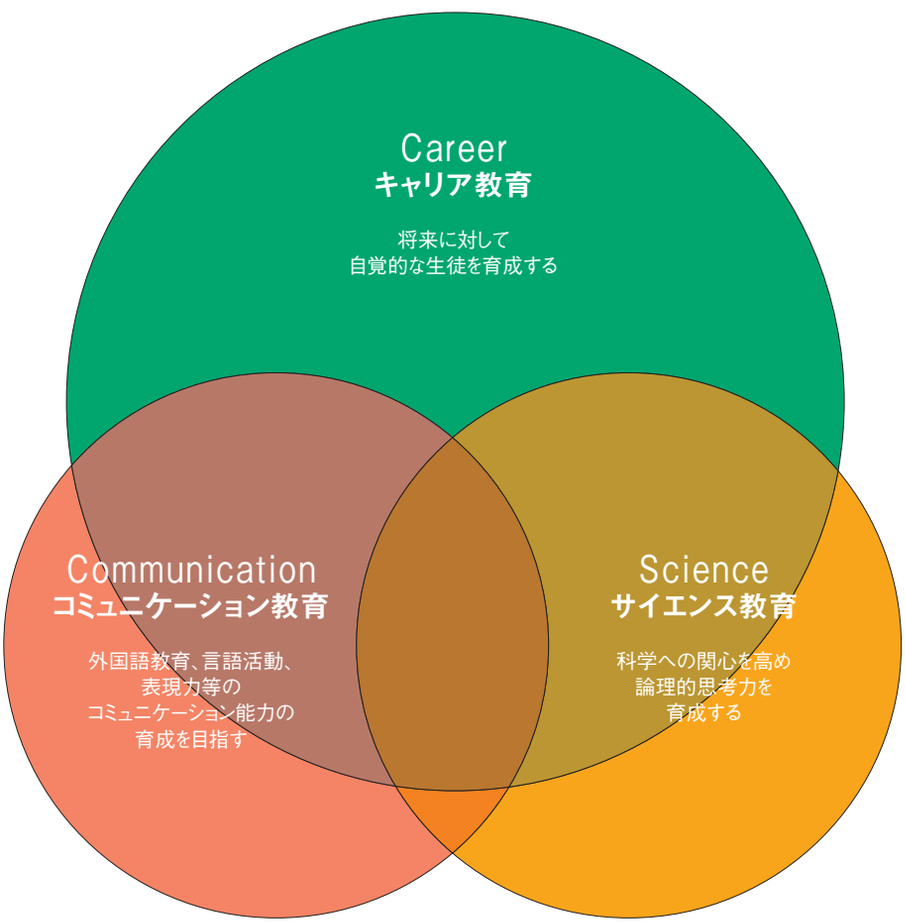
同校がドリカムプランを誕生させたのは94年。当時は「進路学習」という概念すらなく、偏差値から大学を選ぶ進路選択が一般的で、同校もまた熱心な進学指導で〝鍛えるスパルタ進学校〟として知られる学校だった。

それを転換させた背景にあったのは、男女共学化した近隣の私立高校との競争激化、そして個性を生かす教育を目標に、学習内容を削減した新学習指導要領による生徒の変化だ。変化に合わせて高校も変わる必要があると、1学年担任が中心となって宮崎西高校をはじめとする他校視察や議論を重ね、「自己実現を目指す生徒の主体的・総合的な進路学習」というドリカムプランの構想を生みだした。この1学年の取り組みが、学校全体へと広がった。

ドリカムプランは、高校3年間を「自分の夢の実現のためにある」と定義し、そのための活動を総称したものだ。学年ごとに「自己理解」「自己啓発」「自己実現」を目標とし、3年間の段階的なステップを設定した（図3）。放課後や休業期間中の個別活動を含めて同校の学習活動全体がドリカムプランとされたが、主な活動時間にはLHR、00年からは総合学習があてられた。

そこではクラスの枠を超えて志望別に「工学」「人文科学」「芸術」など10のドリカムグループに分かれ、大学教員の出前講座、職業ガイダンスやシラバス研究などに取り組んでいく。校外での

図1 人材育成プログラム「C.C.S」キーワード



Career education with Communicative competence and Scientific attitude in global society

進路指導主事
吉永暢夫先生

教頭
和田美千代先生

統括教頭
長 信成先生

校長
松木敬明先生

体験と生徒の自主性を重視し、一斉活動のほか、ドリカムグループごとや、さらに細分化した10人前後の班単位、あるいは生徒個人で、校内外にて興味・関心に応じた様々な体験をする「ドリカム活動」が活発に行われた。

そうして3年間を過ごしたドリカム一期生は、国公立大学合格者が200人以上と飛躍的に伸び、話題となった（97年度入試・図4）。将来に向けた体験による意欲の高揚をねらったドリカムプランの、成果のひとつだろう。

2005年、活動をスリム化し教員と生徒の負担感を軽減

ドリカムプランの理念やノウハウの継承のために、正副進路指導主事と各学年主任でドリカム活動の企画調整を行う「進路企画会議」の定期開催、学年間の引き継ぎの工夫など、様々な組織面の対策がとられた。しかし、教員が入れ替わるなかで、開始から10年以上も経過すると取り組む意識が変わってきた。「生徒に将来の希望をもたせるはずが、高校時代に職業を決めなくてはとか、全員が夢を追いかけなくてはとか、ドリカムプランの解釈が少しずつ狭まっていったのかもしれない」と振り返る先生方の話から、理念を継承していくことの難しさがうかがえる。

折しもキャリア教育の重要性が叫ばれ始めた時期で、同校は05年に県から3年間のキャリア教育研究指定を受けた。同校はキャリア教育研究

図3 初期「ドリカムプラン」の概要

ドリカムプランの定義:生徒自身が自ら在り方・生き方を考え、体験学習を重ねて、興味・関心、進路希望をもとに具体的な進路設計を作り上げ、自己実現を目指す生徒の主体的・総合的な進路学習

学年	目標	形態	テーマ
1	自己理解	調査	職業
2	自己啓発	行動	学部
3	自己実現	実現	大学

図4 国公立大学合格者数の推移

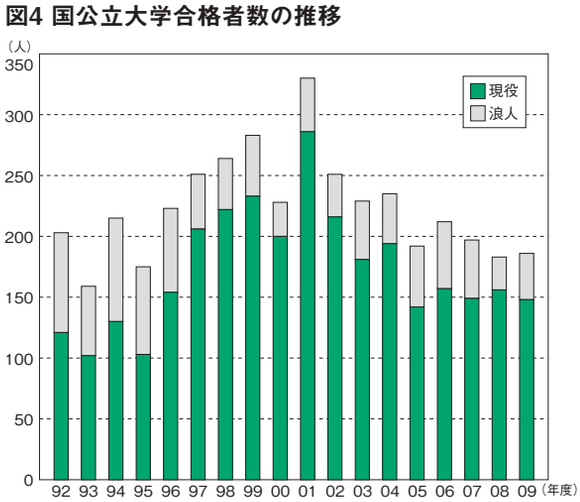


図2 近年の城南高校の動向

年度	トピックス
94	※新学習指導要領実施（新しい学力観） ○「ドリカムプラン」立ち上げ
95	
96	○理数コース設置 ○文科省より高大連携事業の研究委嘱
97	○ドリカム一期生卒業 ○「ドリカムプラン」により福岡県教育文化功労賞受賞
98	
99	
00	○総合的な学習の時間「ジョイント」を学年進行でスタート ○文科省より「教育研究開発学校」に指定（3年間）
01	
02	○「高校から大学へのスムーズな移行をめざして」研究発表大会
03	※新学習指導要領実施（「総合的な学習の時間」本格実施、週5日）
04	※キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書
05	○福岡県重点課題（キャリア教育領域）研究指定校(3年間)
06	
07	○キャリア教育を体系化→教育活動全体を包括したキャリア教育へ
08	○総合的な学習の時間「ジョイント」を「ドリカムプラン」に名称変更 ○理数コース「海洋生物観察実習」長崎大学水産学部との連携でSPP事業に採択
09	○理数コース「理数ゼミ」九州大学との連携でSPP事業に採択 ○人材育成プログラム「C.C.S」スタート

3学年主任
下田浩一先生(右)
進路指導副主任
跡部弘美先生(左)

1学年主任
田中誠司先生(中)
総合学習担当
廣田貴之先生(左)
1学年担任
濱野貴司先生(右)

委員会を組織。第一段階としてドリカムプランの見直しに取り組んだ。

教員と生徒にアンケートを取り、現状の課題を確認。LHR、放課後や休日にわたっていた多種多様な活動の一つひとつについて、意義と効果を整理した。全員対象の活動は総合学習に凝縮。「ドリカムプラン」は総合学習の名称としてスリムに再生された。

2007年、職業マッチングでない日常型のキャリア教育を目指す

現状が整理されたうえでキャリア教育にどう取り組んでいくかが検討され、城南高校が目指すキャリア教育は「学習力を身につけた、広く社会への貢献を志す有為な人材の育成」との定義に至った(図5)。目標は将来の職業を決めることではなく、その後のキャリア形成において必要とされる能力や態度を培おうとする力＝「学習力」を育成していくこと。生徒と大学・職業とのマッチングではない、との軌道修正が図られた。

注目したいのは、「自己の興味・関心」を考えさせるだけでなく、「社会への貢献」という視点が取り入れられた点だ。当時キャリア教育研究委員会チーフを務めた下田浩一先生は、「自己実現というのは、自分のやりたいことを追求するだけではなく、集団の中でどう自分を生かすか」だという。

そうした力や態度は単発のイベントさえ実施すれば育つのではなく、連続した日常の集団活動のなかでこそ育むことができるとした点も特徴的だ。目指したのは、イベント型ではなく日常型のキャリア教育だという。

中核となるプログラムは総合学習「ドリカムプラン」だが、それ以外にも、教科学習面では学習シラバスの作成、課題提出の徹底指導、研究授業と評価アンケートなどを行い、確かな学力の育成と学ぶ楽しさを伝える指導を強化。学校行事やHR活動、部活動は、チームワークの重要性や、自分の役割行動について意識させるよう取り組んだ。他校の実践からスケジュール管理手帳「NAVIノート」を導入するなど、基本的な生活習慣の確立にも力を入れた。

全校をあげて取り組むには、全教員にキャリア教育の意義を浸透させることも不可欠だ。07年度は計4回の研修を開催。キャリア教育研究委員会の報告のほか、専門家の講演を交えて行われた。

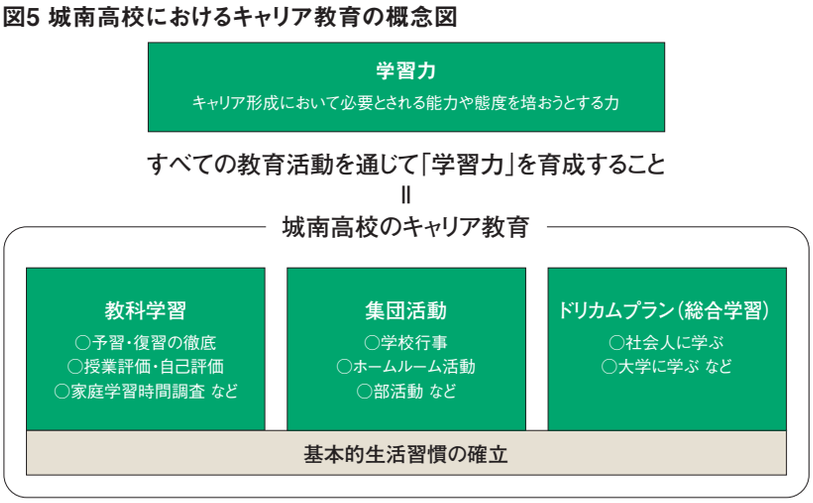
Close up ① 現代社会への対応

全国の高校が取り組むべき新しい教育に挑戦

キャリア教育研究の3年間で校内体制が整備されたことで、次のステップへ進む土台はできていたといえるだろう。そこへ今年度、同校に赴任した松木校長先生。着任2カ月でさっそく行動を起こす。「今の城南が重点的に取り組むべきは、キャリア教育・コミュニケーション教育・サイエンス教育の3点(C・C・S)ではないか」と教員に投げかけた。

「英語科のある前任校での経験も含め、国際交流や海外の高校生の動向を見ていて、これからの若者は地球規模の視野をもち、外国語も使って積極的に自己を表現する力がいっそう求められていると感じていました。本校にはドリカムプラン以来のキャリア教育と、理数コースで培ってきた理数教育があります。これらをベースに、グローバ

図5 城南高校におけるキャリア教育の概念図



生徒指導主事
グローバルコミュニケーション
推進委員会チーフ
村田祐子先生(左)
同委員
藤岡美佐先生(右)

総合学習担当
井上英一郎先生

2学年主任
野見山一義先生

ル化する知識基盤社会という現実を踏まえ、コミュニケーションとサイエンスの要素をより強化させたキャリア教育を行う必要があると考えました。これは本校のみならず、これからの日本全体の教育に求められるものでしょう」

松木校長先生の課題提起は、周辺で私立高校の新設や男女共学化が進むなかで教員たちが感じていた危機感、生徒に対する課題意識とも共鳴した。今後の城南高校について、現場の教員たちがレポートを提出。プロジェクトチームが結成され、教員レポートや外部環境調査結果をもとに具体策について検討が行われた。9月末には「新戦略C·C·S」として方向性が示され、全教員で共有。そこから各学年団、分掌、あるいは新プロジェクトが一気に動き出した。活気づく教員たちについて、1学年主任の田中誠司先生はこう言う。

「学校はともすれば毎年同じことの繰り返し。目の前の生徒を見て、常に新しい取り組みをしていくことがエネルギーになると思います」

Close up ② 具体化の内容

長年蓄積されてきた知見を『ドリカムブック』に集約

「C·C·S」の具体化は、昨年の秋以降、猛スピードで進んでいる。企画進行中のものが多いが、現時点での内容を見てみたい。

「C·C·S」の中心に位置づけられたキャリア教育は、その全体をドリカムプランと総称し、引き続き日常生活を含むすべての教育活動を通じて行う方針だ。その柱となるプログラムは総合学習で、将来の生き方を考えさせるための福岡経済同友会の協力による「社会人セミナー」や、高大連携による出前講座「ジョイントセミナー」などが組み込まれている(図7)。

今年度からはキャリア教育のオリジナルテキスト『ドリカムブック』を作成。これは15年間の取り組みにより蓄積されてきた、同校キャリア教育のエッセンスが詰まったものだ。「働くことの意味」「受験とキャリア」など生徒へのメッセージ、ワークシートや振り返り欄などが掲載され、総合学習などで使えるようになっている(図8)。また、すべての教科・科目について、将来とどうつながるか、各教科担当者による寄稿も盛り込まれている。さらに、全教員が有効活用できるよう、本書の指導案も来年度に向けて作成中だ。進路指導副主任の跡部弘美先生は、それらの編集長としてこう話す。

「『ドリカムブック』によって1つの核が明確になって、総合学習に取り組みやすくなったのではないでしょうか。あとは学年や担任が独自性を出して活用していければと思います」

図6「C.C.S」の主な取り組み

教科	●授業評価に「C.C.S」の視点導入 ○全員対象の学校設定科目「SS環境科学」「SS地球科学」「SS情報統計」、理数コース対象の学校設定科目「SS基礎」「サイエンス・リサーチ」を設定	●『ドリカムブック』活用 ○『コミュニケーションブック』活用
総合的な学習の時間	●3年間のキャリア教育プログラム ○ドリカム・サイエンス講演会(科学的思考力や創造力を触発し、学習意欲を高めるための、最先端科学の研究者による講義) ○ドリカム・サイエンスツアー(環境問題やエネルギー問題に主体的に取り組む姿勢を育成するための体験学習) ○サイエンスミーティング(大学もしくは大学院に在籍している卒業生を講師とした講話など)	
修学旅行	○スキー旅行からキャリア・コミュニケーション・サイエンスをテーマとした選択式修学旅行へ変更	
行事	●城南祭、体育大会、クラスマッチ、各種委員会などで、チームワークや役割行動などの育成を重視 ●理数コースの海洋生物観察実習、先端技術体験講座	
HR	●『NAVIノート』活用	
希望者対象の校外活動	●ジョブシャドウ、インターンシップなど ●オープンキャンパス ●イングリッシュキャンプ、留学、海外ホームステイ ○海外サイエンスキャンプ(オーストラリアでホームステイしながら地元校の理科の授業を受講し、大学や研究施設も訪問) ○シリコンバレー研修 (米国のIT先端企業、大学、NASAなどを訪問する選抜生対象の6泊8日の研修)	

●=今年度実施　○=2010年度以降の予定

1学年用、2学年用がある『ドリカムブック』はそれぞれ100ページ近い。ワークシート付きで、自分の1年間の成長を振り返ることができる

10年以上続く大学教員の出前講座「ジョイントセミナー」。科学、経済など多様な分野の20講座を開講

A5判のスケジュール管理手帳NAVIノート。時間割、夜間の学習タイムスケジュールなどの記録欄がある

あらゆる活動を3つの観点で見直し

コミュニケーション教育のためにはグローバルコミュニケーション推進委員会が設置され、学校のあらゆる活動にコミュニケーション教育の視点を取り入れていくという。目指すのは、日本語によるコミュニケーション能力の育成だけではない。「広く国際社会に貢献する人材に必要とされる、グローバルなコミュニケーション能力を備えるには、英語をはじめとする語学力の向上が必須」と松木校長先生が言うように、海外の教育機関との連携によるプレゼンテーション能力向上プログラムなども予定されている。また、日本語と英語の両方の表現力向上のための情報がまとまった

図8 ドリカムブックの内容（1学年用）

第1章	**キャリア入門** 1.人生は選択の連続 2.キャリアとは? 3.キャリア＝職業生活＋家庭生活 4.職業、働くことの意味 5.職業の選択 （まずは食べていくために／したいこと、好きなこと＝職業?／「なりたい職業がないんです」／偶然の大切さ／天職とは?） 6.家庭生活 7.キャリアは長期的かつ流動的 8.進路選択の5つの入口
第2章	**進路設計と文理選択** 1.キャリア・デザイン 2.教科とキャリア （教科・科目の内容および日常生活や将来とのつながり） 3.文理選択について
第3章	**働く意義を考えよう** 1.「働く意義を考えよう」 2.進路アンケート（未来の自分） 3.ビデオ視聴 4.ビデオ視聴に関するアンケート 5.職に関するレポート 6.「働く意義を考えよう」振り返りシート
第4章	**企業人の話を聞こう** 「社会人セミナー」の実施要領、事前学習、レポート、振り返りシートなど
第5章	**小論文講座** 小論文とは（基本構造やポイントなど）
第6章	**大学入試のしくみ** 大学種別、入試の種類、学問分野と職業分野など
第7章	**先輩たちのドリカム** （卒業生の体験談）

図7 総合的な学習の時間の年間計画（2009年度）

月	1学年	2学年	3学年
4	キャリア入門	キャリア入門Ⅱ	進路ガイダンス、進路講演会
5	進路設計と文理選択	進路設計と文理選択	小論文指導
6	進路設計と文理選択	学問分野研究	進路ガイダンス、小論文講座
7	教育実習生進路講話	心の教育「悠」、ドリカム活動ガイダンス	小論文講座
8		オープンキャンパス、ドリカム活動	
9	進路講演会、進路ガイダンス	進路講演会、ドリカム活動振り返り	進路ガイダンス
10	社会人セミナー	ジョイントセミナー	ドリカム講座
11	進路ガイダンス	ジョイントセミナー	ドリカム講座
12	小論文講座	小論文講座、心の教育「悠」	進路ガイダンス、ドリカム講座
1	小論文講座、心の教育「悠」	小論文講座	ドリカム講座
2	進路ガイダンス	進路ガイダンス、心の教育「悠」	進路ガイダンス
3	卒業生セミナー	卒業生セミナー	

INTERVIEW

教員それぞれが考える「C.C.S」①

●「生徒に対し、とりたててキャリアやコミュニケーションという言葉を使うのではなく、授業のなかで自然に将来を考えさせたり活発に意見が言えたりできるような仕掛けが大切だと考えています。それも個人ではなく、教科や学年といったチームで取り組むことで効果を高められるのではないでしょうか」（進路指導主事・吉永暢夫先生）

●「C.C.Sの3つのうち、私がもっとも課題に思うのはコミュニケーションです。本校の生徒は自分の殻を破りきれない生徒が多い。『できないことは恥ではない』と少しずつでも根付かせて、自分を表に出す表現力をしっかり鍛えていきたいですね」（総合学習担当・廣田貴之先生）

●「本校の生徒は、ものごとを感じる力はもっているのですが、それを表現する点に物足りなさを感じます。人は体験をして肌で感じた時に、本当の言葉が出るもの。体験を通じて言葉を磨けるよう、機会をつくっていきたいですね」（生徒指導主事 グローバルコミュニケーション推進委員会チーフ・村田祐子先生）

●「私は英語を教えていますが、生徒が英語を話せないのは、英語力の問題だけではないと思います。言いたいことがない、意見がない、言う勇気がない、意欲がないという場合もあり、英語の授業改善だけでは足りません。すべての授業、学校全体、そして家庭を巻き込んで取り組んでいけたらと思います」（グローバルコミュニケーション推進委員会・藤岡美佐先生）

企画広報部
二宮浩司先生（右）
同部
深瀬信也先生（左）

理数コース主任
荒木礼子先生（右）
同コース担任
田中志保先生（左）

図9 コミュニケーションブックの目次

1 C.C.Sプログラムについて
2 コミュニケーション教育指導計画一覧
3 城南高校の英語教育
（1）城南の英語教育の特長　（2）CASEC　（3）高大連携などによる英語力向上
（4）海外の教育機関との連携などによるコミュニケーション能力育成
ア.海外修学旅行　イ.海外サイエンスキャンプ　ウ.米国科学研修旅行
4 城南GC（グローバルコミュニケーション）
（1）スピーチについて　（2）プレゼンテーションについて　（3）ディベートについて
（4）ディベートワークシート　（5）英語論文について　（6）英文エッセイの書き方
（7）英語メールと手紙の書き方
5 留学ガイド
（1）留学制度（教務規定）　（2）海外の協力校一覧　（3）留学のスケジュール
6 部活動一覧

【資料編】
1 留学ガイド（資料編）
（1）本校の留学実績　（2）留学の種類
2 外国大学進学支援事業
（1）概要　（2）福岡県提携大学

図10 理数コースの特長的な取り組み（2009年度）

学校設定科目「理数ゼミ」	1・2学年で各1単位。1学年は少人数グループでの実験・実習を通じて探究活動の基礎を身につける。2学年は、09年度からサイエンス・パートナーシップ・プロジェクト（SPP）事業により、九州大学大学院総合理工学府での実験・演習を体験
海洋生物観察実習	1学年夏休みに長崎大学水産学部の協力を得て行う2泊3日の体験学習。主にウニの採集・観察を行う班、魚類の解剖を行う班に分かれて活動し、まとめ・発表を行う。08年度よりSPP事業に採択
先端技術体験講座	2学年夏休みに山口東京理科大学を拠点として行う2泊3日の研修旅行。大学の研究施設を訪れ、少人数グループごとに実験・実習に取り組み、大学の先生から直接、講義・指導を受ける。企業訪問も行い、大学の研究と企業の活動の関連性についても考えさせる

『コミュニケーションブック』も、来年度に向けて制作中だ（図9）。

サイエンス教育においては、理数コースの高大連携授業などで培ってきたノウハウを生かし（図10）、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）を申請中だ。環境や地球をテーマにした学校設定科目「SS環境科学」「SS地球科学」「SS情報統計」を設けるなど、全生徒に展開していく予定。理数コースには、海外の大学などとの連携や英語によるプレゼンテーションなどを取り入れた新たな学校設定科目「サイエンス・リサーチ」などの設置を計画している。

さらに、海外の研究者による講演、オーストラリアの高校にて理科の授業の受講や大学の研究室訪問をする「海外サイエンスキャンプ」、ITの世界最先端シリコンバレーへの生徒派遣などの準備も進められている。SSH担当の井上英一郎先生が「目指すのはコミュニケーション教育と融合させたサイエンス教育」と言うように、「C・C・S」のそれぞれの教育は独立したものではなく、各取り組みにおいて3つの要素を複合的に意識することで、より効果的に人材育成していこうとしている。

教科学習にも「C・C・S」の視点を取り入れていくため、毎年行う教員相互による授業参観の評価シートに、「C・C・S」の3つの観点の記入欄が設けられた。それぞれの観点がどれだけ取り入れられているかを問いかけ、授業改善に生かしていくという。また、この数年間はスキー旅行だった修学旅行を、来年度は体験学習を組み込んだ3つのコースに変更。オーストラリアで自然体験や現地の高校生との交流を行う国際コミュニケーションコース、東京とつくばの大学や研究施設などを訪問するドリカム・サイエンスコース、東京の大学や企業・官庁を訪問するドリカム・コミュニケーションコースの3つから選択できる。

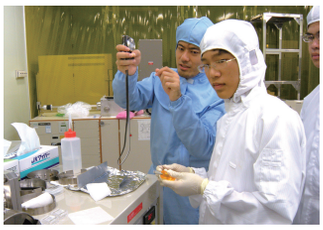
学校外の教育力も積極的に活用していく方針で、すでに今年度はジョブシャドウやインターンシップ、イングリッシュキャンプ、県内の高校生が現代社会の課題について学際的にアプローチしディベートやポスターセッションを行う「スーパーセミナー合宿」などを生徒に紹介し、新たな体験の機会を設けている。これらは全員参加ではないが、周囲の生徒への波及効果について2学年主任の野見山義先生はこう話す。

「参加者の体験を共有することで、参加していない生徒も刺激を受けるようです。また、そういう生徒の姿に触発されて、『次は自分も』と動き始めます。あくまで生徒が自主的に動くことが大切。私たちは背中を押してあげるだけです」

Close up ③ 取り組みによる気づき

現代のキャリア教育に求められる視点とは

初期のドリカムプランから現在の「C・C・S」に至るまでの15年。教員たちが手探りで取り組む中で気づいたことも多いという。それらは『ドリカム



九州大学大学院にて行う理数コースの「理数ゼミ」。専門性の高い教官の指導による実験・実習体験は貴重

ALTの先生の協力を得て教室で開いた「イングリッシュカフェ」。英語でおしゃべりをする気楽な場を提供

ブック』にまとめられているが、その中で今特に重視したい点を、和田教頭先生にあげてもらった。

まずは、進路学習はプロセスにこそ価値がある、ということだ。

「目指す職業や学部を〝決めること〟ではなく、将来について〝考える姿勢や過程〟が大事です。実際に自分の将来を決められるのは、教師や看護師など身近な職業をあげる、せいぜい数%の生徒。決められなくて当然、というスタンスでちょうどいいのかもしれません」

また、職業の3要素を踏まえる必要性も強調する。第一に食べていくために働くという経済的要素、それにより世の中を支えるという社会的要素、そしてその中で自己実現の喜びを感じるという個人的要素の3点があるが、豊かな現代ではとかく個人的要素ばかりに注目しがちだからだ。

それを踏まえて同校は生徒に、「職業＝自己実現」ではないと伝えているという。ドリカムプランは自己の興味・関心から考える進路選択の視点を提供したが、「それは1つのアプローチであって、すべてではない。そこに固執すると、やりたいことがないから就職しない、離職するという生徒を生む危険がある。今の自分の目の前にあることからやってみるという視点も必要」という方針だ。

「どこかに天職があって、それにつきさえすれば満足感が得られるわけではありませんよね。偶然ついた仕事でも、目の前のことを一生懸命やっているうちにおもしろくなり、続けていくうちに天職になるものだと思います」

メッセージの重点や生徒への伝え方は、時代に合わせて変化してしかるべきだろう。ただし、ドリカムプランのヒントを得た宮崎西高校で「先を、生徒の将来を見ろ」という言葉を聞いて以来、「将来に自覚的な生徒を育成する」という信念は一貫しているようだ。成績にばらつきがあるように、進路意識もみんなが満点ではなく、すぐには効果が見えないもの。数十年後に城南で学んだから今の自分があると思ってもらえればよい、という姿勢で同校は取り組んでいるという。

●

多様な立場の教員に「C.C.S」に取り組むにあたっての考えを問うと、それぞれが借り物ではない自身の言葉で思いを語り始める。「『C.C.S』は教育活動として当然すべきことかもしれない。ただ、こういう視点があることにより、生徒とのかかわりを考えるきっかけになります。自分に何ができるか、自分なりの『C.C.S』を日々考えています」と、1学年担任の濱野貴司先生のように自身への影響について語る先生もいる。このようなプロジェクトに取り組むことによる教員の成長も、松木校長先生のねらいの1つのようだ。こうして変化を厭わず意欲的に取り組む教員の姿が一番、〝働くとはこういうことなんだ〟と生徒たちに教えているのかもしれない。

城南の〝3度目の誕生〟は、まだ生みの途中。成果もこれからだ。しかしながら、教員一人ひとりの熱意ある発言や行動が、城南のこれからを期待させる。

INTERVIEW

教員それぞれが考える「C.C.S」②

●「生徒の将来のためには、本物に触れるということが大事です。校内に閉じこもるのではなく、海外にも目を向けて本物に触れる体験を積んでほしい。そうした思いで、アメリカシリコンバレー研修も企画しています。全員参加ではありませんが、報告会などでほかの生徒の関心や視野にも影響を与えられると思います」（企画広報部・二宮浩司先生）

●「基本はやっぱり授業。生徒をわくわくさせるような、小さな感動がたくさんある授業をどれだけ提供できるかで、生徒と教師のゆるぎない信頼関係が生まれる。それではじめてC.C.Sに魂が入り、生きたものになるでしょう。だから、今後も授業は絶対に軽んじないという強い覚悟があります」（企画広報部・深瀬信也先生）

●「C.C.Sの教育は特定の日時や場所で行うものではなく、その機会はいつでもどこにでも転がっているものだと思います。与えられたものを手にするだけでは得るものは少ないと思うので、自分の内側から欲して普段からアンテナを立て、その機会を生かせるように刺激を与えていきたいですね」（理数コース主任・荒木礼子先生）

●「私が大切にしていきたいのは、生徒の“気づき”です。自分の将来やキャリアについての気づき、コミュニケーションの中での気づき、自然科学に対する気づきを促すような機会を与え、生徒が気づいたサインを見逃さず支援していきたいと思います」（理数コース担任・田中志保先生）